高津区おはなしアーカイブ

●森　隆夫（もり　たかお）さん
昭和１２年生まれ　７８歳
川崎市高津区子母口在住

◆女系家族ですね

３人の姉と妹１人の中で男は私１人です。今８５歳、８３歳、８１歳、の姉たちと７８歳の私、そして７３歳の妹は皆、健在です。

平成６年に親父が９４歳で、平成２２年にお袋は１０１歳で天寿を全うしました。お袋はずっと元気だったのですが、お祭りの時期に家族がちょっと目を離したすきに転び、それから亡くなるまで、あっと言う間でしたね。

◆小学校時代の思い出は

橘小学校です。小学校１、２年生のときの記憶があまりありません。それというのも中耳炎を患い、入退院を繰り返して病院通いをしていましたから。進級できる出席日数ぎりぎりだったくらいです。

東急線・学芸大学駅前の病院に通院していたのですが、お袋が武蔵中原駅までいつもおんぶして連れていってくれましたよ。その甲斐あって３年生からは、なんとか元気に通学できるようになりました。

当時の遊びは、ベーゴマですね。登校前に、橘樹（たちばな）神社に早めに集まり、３学年にわたり５人くらいの仲間同士で遊びました。時間的には１５分くらいなもんでしょうが、楽しかったねえ。その神社から下に降りていくと登校する仲間が増えて１０人くらいで学校に着くのです。

部活動というのもなかったし、ガキ大将はいても、ワルではなかったな。

６年生の時にちょっとした事件がありました。当時は学童疎開の子どもが多くいて、その子たちも交えて同級生が３クラスに分かれていました。私のいた２組は平穏無事なクラスなのですが、３組に疎開派のリーダーがいて、その子たちが地元の子に悪さをするんですよ。授業と関係ない朝の時間や休み時間に相当、疎開っ子が幅をきかしてましてね、冬の日に裸足で騎馬戦をやろうと言ってきては、自分たちは上になるし・・・。見ていて３組の地元の子が可哀想でねえ。当時、小学生といったって、刃物は何かしら忍ばせていましたからね。だから、何とかしないといけないと思ったんですよ。

ある日、私ら地元３人の仲間で奴らを懲らしめてやろうと、３対２０人の対決を実

行しようとしました。しかし、なんだか関係ない下級生たちがゾロゾロとくっついて来て結局、先生にバレてしまいましたよ。校長室へ呼ばれて、お互いに謝るよう言われたんだけど、自分達は最後まで謝らなかった。疎開っ子は謝ったんだけどね。だから、最後はビンタでした。

だけど、教室に戻ったら担任の先生が自分達に「お前たちが悪いわけじゃない。叩いて悪かった」と泣いてね。小島先生という男の先生でした。先生も自分達の気持ちを分かってくれてたんだと思いましたね。

この話は親にもできなかったのは、話せばもっと、怒られましたからね。事件のあとは、疎開っ子はおとなしくなりましたねえ(笑)。

うちでは、疎開している人たちに風呂を提供したこともあります。しかし、彼らの風呂のあとは、湯が無くなっていてね、親父から「風呂を沸かせー！」と私が怒鳴られました。沸かした湯が熱すぎて薄めたくても、冬は冷たい井戸水を汲みに行くのが面倒で、我慢してそんな熱い風呂にジンジンと入ってましたよ。なんだか今の医学では、熱い風呂は身体に良くないって言ってるけど、いまだに、熱い風呂だねえ。

当時は学校に弁当を持って行きました。幸い、農家だから弁当の中身は疎開っ子よりは良かったですね。彼らは、サツマイモだけだったり、サツマイモ入りのご飯だったりでしたが、私らは多少、麦が入っていても白米弁当でした。しかし、不思議なもんで、彼らの弁当を見ていると急にそっちのほうが食べたくなるんだねえ。何回か、交換して食べましたよ(笑)。

先生で記憶にあるのは、影向寺(ようごうじ)から来た、音楽の加藤先生です。小島先生という男の先生もいたなあ。

６年の夏休みからは、本牧埠頭の海で１ヶ月過ごしました。親父の弟が近くに住んでいて、私と１歳違いの子どもがいたので一緒に遊びました。この夏休みの過ごし方は中学２年まで続きました。

◆中学校の思い出は

子母口に住んでたので、西中原中学校に入学しました。新作に住んでる子たちは高津中学というように２つに別れました。

その頃の遊びは何と言っても、野球ですよ。武蔵新城の野球チームから、仲間に入れよと誘われ、毎週日曜に参加しました。その頃、姉２人は嫁いでいて人手が足りず、学校のない日曜は私も農家の手伝いがあったのですが、野球仲間が呼びにくるとサッサと野良仕事を放り出して、一緒に行ってしまいました。あとで、親父がお袋にブツブツ文句を言っていたようですがね。

野球と言っても、今の少年野球のようなものです。でも、とにかく私らのチームは強かったんですよ。武蔵新城の仲間たちは皆、引っ越してきた連中で、別の地域で野球をやっていたようでした。

また西中原中学の校庭も当時から広くて野球に向いてましたね。一周４００メートル、直線で１００メートルは取れましたから。

中学時代の弁当は小学校時代と違って、もう自分で作っていましたね。両親は朝早くから野良仕事に出かけてしまっていたから、自分で詰めるんですよ。まあ、おかずと言っても、焼き海苔や梅干ですけど。

中学を卒業すると、高校へは進学しませんでした。姉たちが嫁いでいたので、５歳下の妹と家の手伝いに専念しました。

◆当時の農家の暮らしは

この辺の農家は、私が小学校３年生の時は、だいたい５０軒くらいでした。野良仕事の主力は男手でした。親父は特に、私には厳しかったですね。その分、お袋が可愛がってくれました。１年中、働きましたよ。正月や祭りも関係ありません。正月だって、ネギの出荷がありましたからね。

酒、タバコなどは店から買いました。千年の十字路のところにある雑貨屋です。昔は「坂本」という屋号で、それから店名が「末長屋」に変わり、今はビルになっています。

肉は、めったに食べられなかったけど、魚屋は近くにあり、結婚式などの仕出しもしてくれました。当時は、川崎から行商人が来て、そこで魚料理を頼んだこともありました。昔の結婚式は自宅で執り行いましたからね。

昭和３０年に子母口富士見台の開発が進み、分譲住宅が建ち始めました。その頃、ついに耕運機の登場です。機械化が進み、どんどん畑仕事が楽になりました。

畑を耕すことを「うなう」と言いますが、以前のうない方は、３人が横並びに鍬や鋤を持って、１作１作進んで行きました。人の手で１日がかりだった労働が、耕運機だと１時間ですよ。特に、夏野菜の収穫の後は、助かりました。というのも、トマトやナスやキュウリの収穫のあとは、何人もの足が畑の土を踏みしめて、硬くなっているのです。そこを、うなうのが鍬や鋤では、大変でした。

そのうちに養豚も兼ねるようになりました。農協の組合長から「餌があるから、養豚やってみないか？」と誘われたのです。

当時の豚の餌は、人間が食べにくい小粒のジャガイモや米や麦、川崎にあった味の素工場のサトウキビを絞ったあとの残り汁でした。また、栄養が偏って豚が太らなかったので、近くの食堂から残飯をもらい、大鍋に煮詰めて餌作りもしました。

近所でも４、５軒は養豚を始めましたね。うちは、２５頭を約１０年は続けました。農業と養豚を兼業している昭和３４年に結婚しました。

◆ガソリンスタンドを開業しました

昭和３７年に農地改革が行われ、うちにも１０人位が「土地を分けてほしい」とやって来ました。そんな時に、親父の友人が、うちの前の道と明津から綱島へ通じる道が交わる三角州の土地で、ガソリンスタンドをやらないかと声をかけてきました。丁度その人の息子が私と同級生だったという縁もあったし、すべて経営のノウハウも教えてくれるというのです。私は昭和２９年に自動車免許を取って、すでにオート三輪を持っていましたから、とりあえず、やってみることにしました。昭和３７年３月のことです。

当時は、まだ車社会ではなく、自動車も少なくてやりやすいスタートでした。田んぼ５反は、両親と妻に任せてひたすら、スタンド経営に力を入れましたよ。田植えだけは、スタンドの休業日に、家族全員で 1 度に済ませましたけどね。

そのうちに、日本の高度経済成長の波に乗り、車社会におけるガソリンスタンドの競争率も激しくなってきました。開業したからには、私ももっと頑張ろうという気になってきました。妹も婿を取って、仕事を手伝ってもらいました。一生懸命に皆で働きました。

地元の人が、ガソリンを入れに来てくれて有難かったです。まるで、寄り合い所のように、夜は１０時頃まで話し込んでいくお客さんもいてね(笑)。遠くは、横浜の江田からも来てくれましたっけ。

当時の車種は、用途的にもやはりオート三輪やダットサンが多かったです。

その頃のガソリンスタンドでは、武蔵中原の井村屋さん、井田の松本さん、野川の堀川さんが有名でしたね。

昭和４０年頃にスタンドブームを迎えます。ガソリンの売り方は掛売りで、すべて「ツケ」でした。信用で成り立っていたんです。月末に請求書を出して、支払ってもらいましたよ。しかし、そのうち経済成長も落ち着いてくると、代金の回収リスクも出てきましたがね。

◆いつ店じまいを

農家とガソリンスタンドの兼業は、46 年続けました。旅行なんてなかなか行けなかったねえ。

店じまいのきっかけは、平成２２年の消防法です。この法律は、ガソリンスタンドなどの５０年たった地下タンクをガソリンが腐らないかを点検するということでした。うちのタンクは４８年目で３年ほど猶予期間があったのですが、もはや先のことを考えて店じまいをすることにしました。

そして、私は少しだけどまた色々な野菜を作り始めました。５年間は野菜のガレージセールなどをして楽しみましたね。

◆周りの自然の変化は

昭和３０年に富士見台の開発、３７年にガソリンスタンドが出来て、まったく風景が変わりましたね。それまでの景色と言ったら、畑と寺と神社だけですから。

現在のこの家の下の道路からは、すべて田んぼで、矢上川で遊びました。西ヶ堰という水をせき止める堰があったのでそこで泳げました。しかし、堰の当番の人に「こら、泳ぐな！」と怒られてねえ、当時は何で怒られるのか、意味がわからなかったけど、大きくなったら田んぼに引く水は綺麗じゃないといけなかったんだとわかりましたよ(笑)。

当時のバス便は、武蔵新城行きや溝の口行きがあり、私のガソリンスタンドの所には子母口止まりのバスがすでにありました。しかし、普通はバスなど使わずに武蔵新城や中原なら歩いて行ってました。西中原中学にも子どもの足で２５分で、通学してましたし。

◆戦時中の忘れられない思い出は

近くの蓮乗院というお寺が焼けました。うちでは、空襲警報が鳴った時、近くのサツマイモなどの食糧を入れていた穴倉に避難したら、親父が「ここは危険だから、先の防空壕に移れー！」と大声で叫びました。皆で別の防空壕に走りこんだとき、前の蓮乗院が爆撃され、間一髪で助かりました。だから、今があると思っています。

◆今、振り返って思うことは

自分が農業をやってきて今、思うのは、最初の頃は、肉体的には大変でした。昔は露地栽培で、この辺は雪も降らないから休みもなく、ひたすら働きました。でも精神的には楽だったような気がします。農業を近代化するということは、頭を使って農作業を見直すことになりました。ビニールハウスにしたり、ＩＴ技術を取り入れたりと、現代では別の苦労が出てきたと思うのです。

平成２２年はお袋が亡くなった年ですが、相続税のためにほとんどの土地を手放しました。田んぼも駐車場にしました。子どもたちは、３人とも女の子で、その夫たちも皆サラリーマンです。もはや農家ではなくなりました。

今は自分たちが食べる分だけ野菜を作り、妻が花壇で四季折々の花を楽しんでいます。

嬉しいことに、長女夫婦がこの家を継いでくれています。娘たち３姉妹には、皆３人ずつの子もいます。男の子の孫にも恵まれました。

（平成２８年６月２４日取材）